アジア・アフリカ地域研究 第10-1号　2010年9月
Asian and African Area Studies, 10 (1): 79-97, 2010

フィールドワーク便り

三人でフィールドを行けば文殊の知恵

──東南アジア島嶼部の生態資源に関する共同研究の経験から──

鈴　木　　遥*

「地域」をどのように理解すればいいのか，私は悩んでいた．「私は…の観点で…学的に地域を見ます」と，自身の地域の見方を簡単に決めてしまってよいものか．研究を進めてゆくうえで自身の見方をもつことは必要だが，その見方だけでは汲みとることのできない地域の現象をどうすれば評価することができるだろうか．たとえ今は無理でも，研究を進めてゆくと，いつかこのことを汲みとれるようになるのだろうか．あるいは私は，地域のとらえ方を別に模索すべきなのだろうか．そんなことを考え始めたが最後，私の研究はじわりとも進まなくなった．

私は自分なりの地域の見方をもとうとしていた．それは木材から地域を理解する，というものだ．木材をとらえる観点は特に限っていない．限っていないのか限られないのか，そのあたりは紙一重なのだけれど．ともかく，木材を中心にすえること以外は臨機応変に見方を変えつつ地域を描くというのが，とりあえずの私の研究スタンスである．

私にはもうひとつ悩みがあった．それは私が関心を寄せる「地域」をどうしたらもっと広い地域の中に位置づけられるのか，ということだった．私は現段階ではインドネシア東カリマンタン州を研究の対象地域としている．東カリマンタン州で起こる現象を理解するためには，他地域の状況と比較して，それが地域に限定的に起こる現象なのか，あるいは，もっと一般的な現象なのかを相対的にとらえる必要がある．このため，私は常々，研究対象としている地域以外の地域について考える機会をもちたいと考えていた．

そんな折に，よき先輩の加川真美さん，頼もしい後輩の古川文美子さん（以下の文章では敬称略）と私の三人で，大学院教育改革プログラムのひとつである院生発案共同研究に参加できることになった．このプログラムは，院生三人以上でひとつのグループをつくり，グループごとにテーマを設定しフィールドワークに基づいて研究を行なう，というものである．先のふたつの悩みを抱えていた私は，人の地域の見方を知ることで自分の見方をみつめなおす，さらに，他地域との比較において自身の研究地域をとらえなおす作業をしたいと考え，二人に一緒に研究をしてくれないかと相談をしたのだった．二人は「おもしろそうやね．やってみようか．」と，すぐに私

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

の提案に同意してくれた．こうして，私たち三人は共同研究をはじめることになった．

共同研究のテーマは，「東南アジア島嶼部における生態資源と人々のかかわりの現在」である．テーマ設定について三人で何度も話し合った結果，三人の研究対象地域と研究テーマを包括するようなテーマに決めた．これに基づいて私たちは，東南アジア島嶼部において生態環境と深く関連しながら形成されてきた地域社会の現状を生態資源にかかわる人々の活動に注目して明らかにする，という研究目的を設定した．具体的には，加川は農業資源を，古川はマングローブ資源を，私は木材資源を取り上げ，これらの資源にかかわって生きる人々の活動をフィールドワークから明らかにすることにした．フィールドワークを行なったのは，三人の調査地域であるフィリピン東ネグロス州，インドネシア南スラウェシ州，同国東カリマンタン州である．私たちは 2009 年 3 月中旬から 2009 年 4 月にかけてこれらの地域を三人で巡った．4 月末には，インドネシア・ハサヌディン大学のマカッサル・フィールドステーションにおいて研究報告会を開催する機会を得た．

三人でフィールドに飛び出してみて最初にわかったことは，視点を少し変えるだけで地域の顔は全く違ってみえるということだった．東カリマンタン州で古川の調査に同行した時，加川と私はマングローブから地域をみることができた．加川も私も，マングローブといえば細長い胎生種子をつける植物だと思っていた．ところが調査中に古川がみつけてきたのは，弾丸のように丸くて重たい胎生種子だった．「え！？これもマングローブなん！？」と加川．私も驚いた．一方，古川はいたって冷静，「こういうマングローブもありますよ．」調査に同行してくれた村の人も，こんなのどこにでもあるよと言う．この樹種以外にも，この地域にはさまざまな種類のマングローブが生育している．林内にはテングザルなどの動物も多く生息する．人々が開いた養殖池の周辺には，そんな手つかずのマングローブ林が今も広がっている．私はこれまで東カリマンタン州において調査を行なってきたが，これほどの豊かなマングローブ林をみたのははじめてだった．マングローブがつくりだす生態的特性をうまく利用しながら人々が生きる．ここにあるのはそんな地域の構図だった．

次にわかったことは，私は自身が思っている以上に東カリマンタン州の調査村の生態環境に慣れてしまっていた，ということだった．私がこのことを知ったきっかけは，調査の合間に招待された結婚式でのある出来事であった．結婚式は人生で最も華やかな瞬間

写真 1　小舟に乗ってマングローブ林を行く
（2009 年 4 月 15 日に筆者が撮影）

だ．そんな結婚式に招待された私たちはわくわくしながら会場となっているお宅を訪れ，庭に並べられた椅子に腰をおろした．しばらくして加川が一言こう言った．「ここの村の地面はヌメヌメやな．椅子が地面にめり込んでいく．こんなぬかるんだ結婚式ははじめてや．」

加川の言うとおりなのである．この村の地面はどこもかしこも常にぬかるんでいるのである．華やかな結婚式でさえ，ぬかるんだ地面で開かれる．加川のこの一言を聞いたとき，私はこの村が低湿地に位置していることに改めて気づかされた．それまで私は，この村のぬかるんだ地面をありふれたものとして受け入れていた．これは，私がこの村に長く住み込んで調査をしてきており，知らずしらずのうちに村の生活環境に慣れてしまっていたからだと思う．この村をはじめて訪れた加川の視点によって，私はこの村の立地を改めて理解することができた．

この村が低湿地に位置していることは，東ネグロス州や南スラウェシ州において訪れた地域の土を私自身の足で踏むことによりさらに理解できた．この村ほどぬかるんだ地面は他地域にはみられなかった．そんなこと，現地の土を踏まずとも，たとえば植生分布や湿地の分布を示す地図などから理解できるだろう，と思われるかもしれない．しかし，実際に自分の足で土を踏む経験から得られる理解は，地図からのそれとは比べものにならないほど実感を伴うものなのである．東南アジア島嶼部において長く未開の地であった低湿地．居住環境として決してよいとはいえないこの土地で人々は生きてきた．加川と一緒にみたこの村の農地には，さまざまな作物が混在するように植え付けられていた．あの農地は彼らが低湿地の生態環境のもとで生きてきた証であり，彼らの低湿地開拓の歴史そのものである．低湿地というキーワードから，私は自身の調査地域をより広い地域の中で位置づけるためのヒントをつかんだ．

写真 2　スンブル・サリ村のぬかるんだ地面での結婚式（2009 年 4 月 18 日に筆者が撮影）

三人でともに研究をしてみて，よかった点と苦労した点がある．よかった点は，現地での聞き取り調査が充実したということである．今回の現地調査では，私たちはほぼすべての場所を三人一緒に訪れたため，誰か一人が聞き取り調査をしている時に他の二人がその場に同席する，という機会が何度もあった．一人で聞き取り調査をしていた時，私はインフォーマントへ質問をすることと，それに対する答えを理解することで精一杯だった．相手を目の前にすると，その場の会話を円滑に進めることを意識するあまり，自身の質問内容以上の会話を展開することはなかなか難しかった．ところが，三人で聞き取り調

写真 3　聞き取り調査をする古川さんと，そのやりとりをそばで聞いている加川さん（2009 年 4 月 1 日に筆者が撮影）

査に臨むと，質問をする私以外の二人がこの部分をうまく補ってくれることがあった．質問をする私は通常どおりインフォーマントとの会話に集中するのだが，私以外の二人は横でリラックスして会話を聞くことができる．そのうち二人は会話の合間にひとつふたつと質問をするようになる．彼女たちの視点で発せられた質問は会話に変化をもたらせ，インフォーマントから別の話を引き出す．さらに，それ以降の会話を盛り上げ，結果として聞き取り調査を充実させることにつながった．これは思わぬ発見であった．

一方で，三人で研究をしたからこその苦労があった．それは，研究テーマを設定する際や研究報告書を作成する際に意見を集約させることが難しかったということである．すでに述べたように，本共同研究のテーマは三人の個人研究のテーマを包括するようなものに設定したが，欲をいえばもっとテーマを絞り，各々のメンバーの見方をもっと重ねるようにして考察を行ないたかった．研究報告書の作成においては，一人が書いた文章を次の瞬間には別の人が修正するという作業を何度も何度も繰り返すことで文章を仕上げていった．この推敲作業をとおして，私たちはお互いの地域に対する見方を理解していった．この作業は時間と労力のかかる大変なものであったが，共同研究を終えた今，これこそが本共同研究の醍醐味であったと思う．

今回私たちが訪れた地域に暮らす人々は，生態資源を生産・利用するということと生態環境を管理・保全するということの狭間で暮らしを営んでいた．ここから私たちが考えたことは，地域は違っても生態資源にかかわって生きる人々が置かれている状況は共通している，ということだった．また，この考えに至ったことで私は，木材から地域をみるという私の視点は他地域における生態資源に関する課題に応用しうるものであるということも理解できた．ゆえに私は，木材への見方を深めつつ，木材にこだわる地域研究スタンスをしばらく追及していこうと考えている．

共同研究を終える頃，冒頭に挙げた私の悩みはいつのまにか解けていた．加川と古川とともにフィールドを駆け回ったことで，私は以前よりも広い視野で地域をみることができるようになった．三人で描いた「地域」は一人で描くそれよりも何倍も厚みがあった．私は「地域」がさまざまな人によって評価されることの重要性を改めて感じた．本共同研究での貴重な経験をきっかけに，今後は自身の研究をさらに深めつつ，地域研究の方法としての共同研究の可能性について探っていきたい．